永井龍男全集

第八巻

永井龍男全集 八

長篇小説Ⅳ

講談社

永井龍男全集 第八巻
昭和五十六年十一月二十日 第一刷発行

著者 永井龍男
発行者 三木 章
発行所 株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号 一一二
電話 東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
振替 東京八―三九三〇
定価 四二〇〇円
装幀 原 弘
印刷所 信毎書籍印刷株式会社
製本所 島田製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。
© Tatsuo Nagai 1981, Printed in Japan

ISBN4-06-119288-4 (文1)

目次

皿皿皿と皿……5
コチャバンバ行き……159
石版東京図絵……279
あとがき……493
解題……499

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

永井龍男全集　第八巻

皿皿皿と皿

浦島太郎

東京駅から一時間ちょっとで、電車はこの駅に着く。

あいた座席にもあみ棚にも、読み捨てた夕刊がそこここに眼立つ。

駅前にバスが数台、電車から降りてくる人を待っている。駅の表の時計は、九時過ぎをさしている。その時計は明るく、駅の高い屋根の中央にあるので、学帽に着けた記章のようにも見えた。

海の方と、山寄りの方に別れて、やがてバスが動き出す。

東京へ通勤している客は、もうたいてい家へ帰った時刻だし、東京から避暑に来たり、泳ぎに通って来た客も、もう半月ばかり前に、ようやく後を絶った季節で、バスの中にも町筋にも、ほっと一息ついているような静けさがある。

海寄りに行くバスが、銀行の前やパン屋の前を通る。八百屋の店先には、まっ青な蜜柑が積んであった。大きな寺の次ぎの停留場で、ボストンバッグをさげた三浦貞作が、たった一人下車した。

古いソフトもレインコートも、彼が五十九歳であることを証明し、もう二、三日で十月の来るのを説明しているかのようである。

三浦貞作は、写真製版技術のベテランで、停年後も一週に三日、東京の会社へ顔を出す。今夜は、名古屋に新設された工場へ出張して、一週間ぶりに家へ戻るのである。

タバコ屋を兼ねた薬局が一軒、通りに灯をこぼしているだけで、その辺は住み古した住宅ばかりである。

バスの行ってしまった後のくらがりに、三浦貞作の靴音が聞こえはじめる。痩せた男だなとは、その足音だけで分かる。

ところが、ものの四、五間行った辺りで、三浦貞作は立止ってしまった。その大通りから、自分の家の門灯が、植込みの芭蕉の広葉が見えたからである。そんな筈はあり得ない。貞作の家は横丁の奥なのである。

とにかく、様子が一変している。

「……そうか。とうとう、ここまでやりやがったか」

そう、貞作が思い当たったとたんに、

「パパ、おかいんなさい」

と、うしろから声をかけられた。

「カバン、持つわ」

娘の明子が、もうカバンを取っていた。

「どこへ行ったんだ」

「電球が切れちゃったの。灯下親しむ候でしょ」

と、笑って紙包みを示した。

「道を間違えたかと思った。あれが、家だろう？　綺麗にやったもんだね」

貞作は、レインコートのポケットに両手を突っ込んで呟いた。

「そうなのよ。バスの窓から、家の門が見えるんですもの。なんて、小さな家なんだろうって、感心しちゃった」

ここには、つい一週間前まで、大きな邸があったのだ。大正から昭和の初めにかけて、政界の裏表で活躍したボスの建てた家だが、その爺さんが死んでから、持主は転々として、最近は人が住んでいるのかいないのか、外からは見分けがつかなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

歌舞伎の舞台装置のような、たっぷり両袖を持った門構は、バスの埃りを浴びたまま永い間締切られて、抵当に入っているとかいないとか噂されているうちに、貞作が出張旅行に出る二、三日前から、急に人足の出入りが激しくなり、トラックが行ったり来たりして、邸内で幾棟かに別れた建物が、すべて取りこわされてしまったという訳である。

「やっぱり広いわ。全部で、二千坪とかって云ってた。パパ、あれ見た?」

明子に指されて、貞作はその空地の一隅に白壁の土蔵を見つけた。それだけが、どこかの灯をうけて、ほんのり白く残っていた。間の抜けた、淋しい眺めである。

「そうか。おれが発つ前は塀にかこまれていたからな。それで、まるきり感じがちがってしまったんだ」

「横丁は、瓦のかけらと壁土でたいへん。気をつけないと……」

邸跡の空に、海に近い星がいっぱい光っていた。

三つのやかん

通勤の身仕度を終えた明子が、腕時計をまきまき、茶の間の食卓についた。
スイッチを入れればいいように、パン焼器もそこにあった。
「……ねえ、ママ。あたしが顔洗っている時、誰か来てたわね」
と台所の方へ向いて、明子が云った。
「来ていたんじゃないわ。もう、帰る処だったのよ」
「どっちでもいいけど、誰？」
「大谷さんの、お時さんよ」
「ずいぶん早く来たのね。なんの用？」
母と娘の会話は、そこでと切れた。
明子は庭へ首をまわした。朝靄が、まだほの青く残っている。お時さんは、明子とおない年位の、知人の家の女中さんである。
「パンのスイッチ、入れましたか？」
「うん、入れた」
牛乳のあたためたのと、半熟の卵を盆にのせて、母の由紀子が姿を見せた。
「お時さん、これから家へ帰ると云うのよ」

「家へ帰るって？」
「大谷さんを辞めて、家へ帰ると云うの」
「ええ？　どういう訳」
明子がスイッチを切ると、狐色のパンが二枚、そろって耳を出した。
「困っちゃったわ。ひとの家のことですもの、立ち入ったことも云えないし」
「大谷さんじゃ、知っているの？」
「置き手紙をして、出て来たと云うの」
「いったい、どうしたってこと？」
「きのうはお休みで、お時さん、朝から東京へ行ったんだそうよ。十時過ぎに帰ったら、もうみんな寝ていたそうだけど、お台所に行くと、ライスカレーを食べたお皿が、重ねてあるんですって。それを洗ってしまって、アルマイトのやかんが眼の前に行列しているから、蓋を取ってのぞくと、大中小、三つのやかんとも、お茶がらでいっぱいなんだそうよ。まず小さいのを使って、それからお客さんでも来たのかも知れないわ。こんどは中ぐらいのを使って、一番お終いには、みんな揃った処で、湯沸しの大きなやかんで、お茶をいれたって訳よ。お茶がらって、方々へくっ着いてなかなか捨てにくいものだから、そんなことしたんでしょ。三つとも詰まっていれば、腹も立つだろうと思うの」
「大谷さん、人数が多いから」
「お時さん、なんだかとてもかなしくなっちゃったと云うの。それでも、台所を片付けて、自分の部屋へ戻ろうと思って、ひょいっと食堂のテーブルの上を見ると、二十世紀の皮を山盛りにしたお皿と、コーヒーポットやコーヒー茶碗が置いてあると云うのよ。あんまりだと思ったら、涙がこぼれて、それで決心したと云うじゃないの。うっかりしたことは云えないし、困っちゃったわ」
「きん子ちゃんも、みき子さんも、案外無神経ね」

と、明子は大谷家の娘達の名を云った。
「それに、洋一さんが一枚加わるんですもの。お母さん、なんにもおっしゃらないのかしら。足を拭いた雑巾なんか、そこらへほうり出して、誰もゆすいだことはないって、お時さん泣いてたわ。これは、あなたも耳が痛そうね」
「置き手紙に、みんなそれ書いたのかしら」
「まさか。お暇をいただきますって、それだけだそうよ」
「三つの、やかんか。さ、出かけようっと」
「あなたも、パン屑くらいは、綺麗になさい。なんです、その膝……」
「ナプキンをくれないから」
と、スカートを両手でつまんで、明子が席を立つ。
「三つのやかんが、どうしたというのだ」
縁先に下駄を脱いだ三浦貞作が、もっともらしい顔で上がってきた。きょうは、会社へ行かぬ日である。
「あなたは知っていらっしゃるでしょう？　お時さんが来たの」
「台所で、コソコソ話をしていたのが、その人か」
「大谷さんとこの、女中さんですよ」
「朝早くから、なにごとかと思った。三つのやかんが、どうしたんだ」
と、貞作はバラ切りばさみを、棚にのせた。
「行ってまいりまアす」
夫婦のやりとりをよそに、明子の声が玄関にあがった。
三浦家は、だいたいそんな三人暮しである。

焼栗

毎朝出勤する人は、何輛目のどこと、いつの間にか乗る車の入口まできまってくる。たまに別の車輛に乗ると、東京へ着くまで、いや半日位、なんとなく落着かない。

そんな人たちが、寒暖計の目盛りのように、ホームに幾つかの列を作る。

明子がその一つに加わると、次ぎの列の尻ッぽの方から、「アキ」と名前を呼ばれた。

顔がいくつもいくつも並んで、その中にこっちへ会釈している青年の顔があった。

はじめは見違えたが、

「なァんだ」

と、口の中で云い、明子も微笑を返した。

「来いよ」

「いや。こっちへいらっしゃいよ」

制服制帽の大谷洋一が、素直に明子の列に寄ってきた。

「どうしたの。きょう、早慶戦？」

「冗談云うなよ。面接だ」

「メンセツって？」

「シュウショク、シケンの、だよ」

噛んでふくめるという言い方で、大谷洋一が明子の耳に、口を持って行った。
「ああ、そうか」
「久し振りに着たら、咽喉が苦しいや」
「背広より、大きく見える」
「いけねえ、ナフタリンが出て来やがった」
と、洋一はポケットから、セロファンの小袋をつまみ出した。
「なんていう、会社？」
「決まらないうちは、発表しないよ」
「ええ？　なんて云った？」
電車が入ってきたのだ。
もちろん、席なぞ空いている訳はない。
つり皮だって、必要でなくなる位混んでくる。
「けさ起きたら、お時さんがいないのさ。家中、びっくりぎょうてんだ」
ああ、そうだ。それだったんだと、明子は思った。あぶなく、そうなんですってねえと、口を出る処だった。
「ふーん。どうして？」
「面接の朝ときているから、お袋が張り切って起こしに来て、お時さんがいないって云うのさ。まあ、ゆうべ帰らなかったのかしらなんて、女中部屋へ行ってみると、焼栗の袋と書置きがあったとさ」
「変な取り合わせね」
「一粒も、食べてないんだってさ」
「荷物は？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com